

# 八尾南遺跡の調査



2004. 1. 24



財団法人 大阪府文化財センター

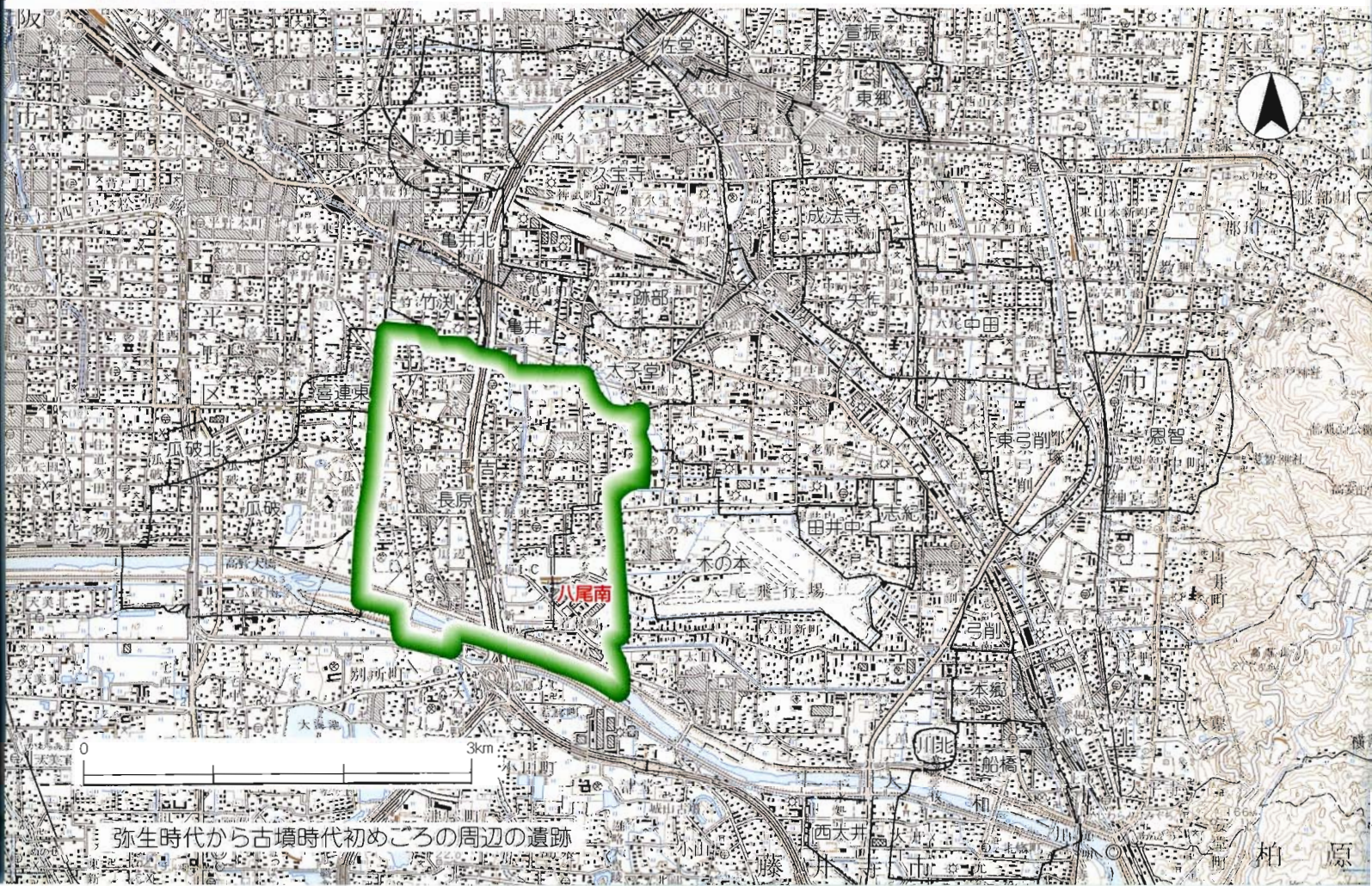
# 八尾南遺跡の位置と周辺の遺跡

八尾南遺跡は、八尾市域の南西部、八尾市西木の本・若林町に所在する旧石器時代から中世にかけての遺跡です。遺跡は、河内台地と呼ばれる南北に延びる段丘の北東端に立地し、現在の地面も、今回の調査地付近を最高所（標高12.8m前後）として北あるいは東側へ緩やかに傾斜しています。遺跡の広がり、南北1.5km、東西0.5kmほどですが、西側に接して存在する大阪市長原遺跡とは同一の遺跡と考えられており、2つの遺跡を合わせると南北約2.3km、東西約2.0kmの広大な範囲となります。

両遺跡の周辺には、弥生時代から古墳時代初めごろの遺跡が数多く分布しています。主な遺跡としては、ムラのまわりに溝を巡らしたこの地域最古の環濠集落である田井中遺跡、弥生時代中期に大きく発展し、ムラの規模が径200m以上を超える亀井遺跡・恩智遺跡、26×15mの巨大な方形周溝墓が検出された加美遺跡、あなの中へ意図的に埋められた状態で銅鐸が発見された跡部遺跡、古墳時代初めごろの墳墓が50基以上確認されている久宝寺遺跡、同じ時期の大遺跡群である中田遺跡群（萱振・東郷・成法寺・小阪合・中田・矢作・東弓削）などがあげられます。



古墳時代初めごろの地形と遺跡の位置  
(山田隆一「古墳時代初頭前後の中河内地域」  
挿図を改変・作成)



弥生時代から古墳時代初めごろの周辺の遺跡

# 八尾南遺跡の発掘調査

八尾南遺跡の存在が初めて明らかとなったのは、大阪市営地下鉄谷町線の工事に伴って1976年に行われた八尾市教育委員会による試掘調査<sup>しくつ</sup>でした。1978～79年には、「八尾南駅」を中心とした36,000㎡に及ぶ広範囲で発掘調査が実施され、古墳時代初めから中期の集落が検出されたほか、この遺跡が旧石器時代から鎌倉時代に及んでいることが確かめられました。

その後、この地域では区画整理を終了した駅南部を中心に開発が進み、これに伴う調査<sup>ともな</sup>が、大阪府教育委員会や（財）八尾市文化財調査研究会などにより、約40ヵ所で行われています。

今回の発掘調査は、国土交通省が防災<sup>みずべ</sup>や水辺の環境整備のために計画している大和川改修（高規格堤防<sup>こうきかくていぼう</sup>）事業に伴うもので、2002年度より（財）大阪府文化財センターが実施しています。

これまでの調査では、弥生時代前期終りごろ（今から約2,300年前）、弥生時代後期（約1,900年前）、古墳時代初め（約1,800年前）、平安時代後半（約900年前）の4時期の遺構面<sup>いこう</sup>が確認され、それぞれ多くの遺構や遺物<sup>いぶつ</sup>がみつかっています。さらに、部分的に行った下層調査<sup>かそう</sup>では、約2.8m下の地層から旧石器時代の石器が出土しており、これまでの調査成果を裏付ける形となりました。このうち、古墳時代初めごろの遺構面では、周囲<sup>みぞ</sup>を溝で方形に囲み、溝を掘った土を盛り上げた内部に死亡した人を埋葬<sup>まいそう</sup>した「方形周溝墓」と呼ばれるお墓が30基以上見つかり、調査地付近がこの時期の大きな墓地であったことがわかりました。また、同時に検出された川や溝の中からは、何百個もの大量の土器が出土しています。



古墳時代初めごろの方形周溝墓群

# 姿を現わした弥生時代のムラ



弥生時代後期遺構面の主要遺構分布図

調査地外へ延びる水路 (東から)



河川東側の居住域（南西から）

古墳時代初めごろの遺構面の下には、川の氾濫によってもたらされた厚さ40～70cmほどの土砂が積もっています。弥生時代後期の遺構面では、この厚い土砂に守られて多くの遺構・遺物が良好な状態で見つかり、当時のムラの様子を具体的に知ることができました。

弥生時代のムラは、人々が住んでいた居住域、食料である米や畑作物を作っていた生産域、死亡した人を埋葬する場である墓域、の大きく3つの空間で構成されます。このうち、今回の調査では、墓域以外の土地利用の状況が明らかになりました。

八尾南ムラの居住域は、川を挟んで東西2つに分かれ、東側の居住域では竪穴住居2棟、西側では竪穴住居4棟と掘立柱建物2棟、井戸1基が見つかりました。生産域である水田は、西側居住域より10cmほど地面が低くなった調査地の西端一帯に広がっています。あぜ（畦畔）に区画された1区画あたりの面積が小さい小区画水田と呼ばれるもので、水田の形は四角形・五角形・長方形・台形とさまざまです。西側居住域との間には浅い溝が設けられています。これは、より南側の水田からの排水を北側の凹地に送る水路と思われます。さらに、調査地の北西角と南東部には、深さ1m前後の深い溝が掘られており、後者では盛土による堤が両側に備わっていました。これらも水田に伴う水路と考えられ、居住域周辺にはほかにも生産域が存在していた可能性があります。

なお、住居のまわりや川の岸边、水田との境など地面の落ち際には、生活に用いていた土器が捨てられたような状態でたくさん出土しました。



住居のまわりに残された土器（南東から）



八尾南ムラで使われていた土器

# 住まいを語る

八尾南ムラの人々は、「**竪穴住居**」と呼ばれる住まいで暮らしていました。竪穴住居とは、地面を深く掘り下げて地下に床を作り、そこに柱を立てて屋根を覆った半地下式構造の住居です。ところが、発掘調査で見つかる竪穴住居は、上部の土が大きく削り取られていることが多く、床までの深さが数cmから20cm程度のものも珍しくありません。しかし、今回見つかった八尾南遺跡の竪穴住居は、洪水による土砂に厚く覆われていたため非常に残りが良く、建てられた当時の状態を知ることができる大変重要な資料となりました。そこで、その調査成果をご紹介します。



竪穴住居を構成する各遺構（竪穴住居6：南から）



円形の竪穴住居1（周堤除去後：北東から）

## かたちと大きさ

掘り下げられた竪穴の形は、見つかった7棟の住居のうち竪穴住居1が円形であるほかは、いずれも角の丸い長方形をしています。大きさについても、1が直径約8mと大きいものの、ほかは長辺4～5.5m、短辺3.5～4.5mと規模が小さく、床面積も半分以下しかありません。このことから、竪穴住居1は、通常の住まいとは異なる役割を持つ施設（集会所など）であった可能性が考えられます。

## 周堤

各住居の壁の外側には、裾の幅が2～3mほどの帯状の高まりが巡ります。この高まりは、周堤と呼ばれる盛土によって作られた人工の堤で、住居内に水が浸入することを防ぐためのものと考えられます。周堤の高さは20cm前後ですが、竪穴住居6のように40cmを測り、周堤の上から床までの深さが90cmに及ぶものも存在します。

このような周堤を巡らした住居は、弥生時代後期の静岡県登呂遺跡（平地住居）や古墳時代の群馬県黒井峯遺跡の例が有名ですが、近畿地方では例が少なく、東大阪市巨摩・若江北遺跡（平地住居）や長原遺跡・久宝寺遺跡など数例が知られているのみです。

なお、竪穴住居4・6では、周堤の外側へさらに溝や穴を溝状に巡らしており、最近検出例が増加している周囲に溝や連結した土坑を巡らす住居との関連が注目されます。



竪穴住居2・3の周堤（西から）



周堤の高さと住居の深さ（竪穴住居6：南から）

## 主柱穴

屋根を支える中心的な柱（主柱）を据え付けた穴を主柱穴と呼びます。主柱の配置や本数は、竪穴住居の構造を復元する重要な手がかりとなりますが、住居の形や規模、あるいは時期や地域によってさまざまです。

八尾南遺跡の場合、最も小さい竪穴住居2は主柱穴が確認できなかったものの、ほかの長方形の住居は長辺に平行して2本の主柱を配置しています。このうち、住居3・5では1本、6では2本とも柱の根元（柱根<sup>ちゅうこん</sup>）が残っていました。一方、円形の住居1では8本の主柱穴が認められましたが、北東・南東側では2基が対となっており、5本の主柱配置で最低1回の建て替えが想定できます。

## 炉

竪穴住居2・5以外の住居では、中央に炉が設けられています。穴を掘り、中に灰を入れて火を使用した「灰穴炉<sup>はいけつろ</sup>」と呼ばれるもので、直径は0.7～1.1m、深さは10cm前後（住居3・4）の浅いものと80cmを超える深いもの（住居1）があります。

## 壁溝

住居壁面の下に沿って掘られた小溝で、除湿や排水のため、あるいは壁面の崩落を防ぐための土留め材を埋め込むための溝と考えられています。

## 排水溝

竪穴住居1・2・6では、住居内から外に向かって溝が掘られていました。溝の出発点は、炉（住居1）・壁溝（住居2）・土坑（住居6）とさまざまですが、いずれも川や谷状の凹地といった土地の低いところへ延びていることから、排水用の溝と考えられます。溝の断面形はいずれもV字形で、0.8～1mと深く、住居内とは壁面にあけられたトンネルでつながっています。このうち、住居1の排水溝は10m以上と長く、溝の北側には堤が設けられ、住居を出たところでは、半分に割って中を割り貫いて作った長さ1.7mほどの木の樋<sup>とい</sup>が置かれていました。



2本主柱の住居（竪穴住居5：南から）



規模の大きな灰穴炉（竪穴住居1：南から）



住居内部の排水溝の出口（竪穴住居6：南東から）



谷状の凹地につがった排水溝（竪穴住居6：西から）



排水溝の中の木樋（竪穴住居1：南から）

# 土器に描かれた龍

鹿・建物・人物・魚……。弥生時代の人々は時々、土器の表面をキャンパスに絵を描いています。大部分は弥生時代中期のものですが、上にあげた画題にやや遅れて、後期には「龍」が描かれます。龍は中国で創造された架空の動物で、水の神とされてきました。

この龍の絵画土器が、竪穴住居3の排水溝の中から出土しています。大阪府下のほかの遺跡で出土している例と比べても、その表現方法は丁寧で、鮮やかな筆さばきには目をみはります。弥生人が龍の図柄を目にしたのは、「方格規矩四神鏡」<sup>ほうかくきくしんきょう</sup>と呼ばれる中国から伝わった銅鏡の文様が最初と考えられていますが、八尾南ムラの人たちは、果たしてこの鏡を見ていたのでしょうか。



排水溝から出土した絵画土器（竪穴住居3：西から）



「龍」を描いた土器



同 頭部付近拡大



八尾南遺跡

船橋遺跡

池上曾根遺跡

恩智遺跡

大阪府下各遺跡の「龍」（八尾南以外は佐原真・春成秀爾『歴史発掘5 原始絵画』より作成）

## まとめ

河内平野に住んでいた弥生時代の人々にとって、自然災害、特に一挙に生活の場を失わせる洪水は、現代の私たちでははかり知れない脅威であったと思われます。ところが今回、その洪水が当時の地面を守り、ここに住んでいた人々の生活の様子をより具体的に私たちに伝えることになろうとは、何とも皮肉なものです。ムラの大きさや住まいの構造、水田の場所やその広がり、絵を描いた土器……。私たちは今後、伝えられたこれらのメッセージをもとに、八尾南ムラの人々の暮らしぶりを復元していきたいと思います。

八尾南遺跡の調査 八尾南遺跡現地説明会資料

発行 財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 ☎072-299-8791

発行日 2004年1月24日

印刷 (株) 中島弘文堂印刷所